

まちやむら，そこに住む人びと（＝ざいち）の，
知恵や生き方（＝ち）から学び，実践する活動です。



京都大学
生存基盤科学研究ユニット
東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」・
「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」

亀岡フィールドステーション

12 連筏の復活に向けて (1)

大阪商業大学経済学部 原田禎夫

これまで、さまざまな助成を受けて実施してきた保津川筏復活プロジェクトであるが2013年からは京都学園大学の共同研究プロジェクト「保津川の筏下り技術の記録と再現 - 亀岡と京都をつなぐ自然・文化・経済の回廊の再興 -」の一環として、引き続き筏流しの復活に向けた研究が進められている。この研究プロジェクトでは、これまでの筏組みや筏流しの記録・再現だけでなく、筏流しに使用する材木の伐採・搬出、筏組みに使用する資材の製作と調達、そして筏で運んだ材木の利活用までを総合的に研究するものである。

また、筏流しそのものについても、これまでの6連の筏から、保津川の筏の本来の姿である12連筏の再現に取り組むこととしている。元筏士からの聞き取り調査でも、6連の筏は操縦技術が遊船とさほど変わらないということであり、これまでは安全を考慮して6連の筏によって筏流しを行ってきた。しかし、材木の搬出や流通のことを考えると、一度に大量の材木を運べる12連の筏流しの復活は不可欠であり、そのためにどんな資材や技術が必要なのかを

明らかにする必要がある。

今年度は、まず流れの穏やかな保津橋から保津峡の入り口、山本浜にかけて12連筏を流すという計画を立て、さまざまな事業に取り組んできた。まず、今後大量に必要なカンと呼ばれる金具を亀岡に唯一残る現役鍛冶士である片井操氏に再び発注した。そして、筏流しに用いる材は、不足分を亀岡市篠町まちづくり推進会によって里山の再生プロジェクトが進められている「市民の森・長尾山」に依頼して伐採・乾燥・搬出という一連のプロセスを実施することとした。

さて、この長尾山は、もともとは篠町野条区の財産区有林であったものを、亀岡市の火葬場建設用地として、市土地開発公社が昭和59年に6億1200万円で先行取得したものの、火葬場建設のめどが立たず、いわゆる塩漬け土地として長年放置されてきたものである。この土地を、市主導の経営健全化計画により特例債により10億7000万で買い戻したもので、地元自治会を中心に、市民主導で里山再生プログラムがスタートしていた。

長尾山は保安林に指定されているため、京都府の許可無く自由に樹木を伐採することが出来ないこともあり、特に手入れがなされなくなった人工林の荒廃が進んでいた。筏流しのための材木を伐採・搬出するためには煩雑な手続きが必要であるが、ここでも行政も参画する京筏組がうまく機能し、滞りなく手続きが完了し、2013年9月に京都府立林業大学校の実習も兼ねて筏に用いるスギ44本の伐採が行われた。

また、今回は将来の材木の活用も視野に入れ、伝統的な技術である山中での「葉枯らし」にも取り組んだ。これは、伐採した木の枝や葉を残し、皮だけを剥ぐことで自然に乾燥させる技術であるが、機械乾燥と異なり、ゆっくりと乾燥させることで反りや割れが少なくなるとともに、防虫効果も期待できるものである。こうした現代ではほとんど見られなくなった技術の検証は、将来的に筏流しに要する資金を持続的に獲得するために、筏流しや材木の付加価値を高めるという意味でも重要なものであると考えている。



写真：伐採した材木の皮剥の様子。この作業も、市民ボランティアの手で行われた。(写真提供 軽野 保氏)

農具 (5) : 百姓の道具は生活の基 ミノ (簀)、モッコ

守山FS 藤井美穂

本ニューズレター No.40 で述べたI家の納屋の様子である^[1](写真1)。納屋の天上から木の枝を利用した鉤(かぎ)が吊されている(写真2)。これらの鉤(かぎ)にミノ(簀)、コモ、縄などが掛けられていた。今回はこうした納屋の天井からつるされた鉤に掛けられていたものを紹介したい。

「ミノには『男ミノ』(写真3)と『女(おなご)ミノ』がある。男ミノはワラ仕事で作ったけど、女ミノはよそで買ってきた。女ミノはイグサで編んだゴザの裏に雨がとうらんように渋紙を手縫いしたもの。長さは首から膝までの長方形で、背中に背負う」(A氏 1926年生)。



写真1: I家の納屋

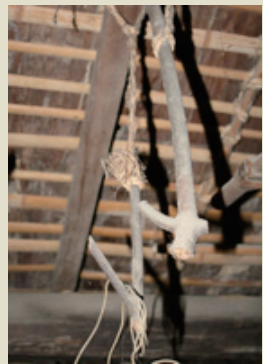


写真2: 納屋の天井からつるされた木の鉤

ミノは雨の日の苗とり、田植え、草取りに用いた。女ミノは夏の炎天下の草取りの日よけに使った。

ミノはワラとシュロのものがあつたが、開発(かいほつ)集落ではシュロの木がなかったために、ワラミノを作つた。ワラミノはシュロミノよりは重いが、ワラはシュロに比べて雨をはじき防水にすぐれていた。雨はワラを伝って滴り落ちる。

男ミノは二つに分かれている。A氏に教えてもらつて男ミノをつけてみた。まず体の前をおおうミノをつけてから、背中をおおうミノをつける。初めてミノをつけたのだが、ゴワゴワして重い。背中にほっこりとしたぬくもりを感じる。雨の日の田植えや草取りの体勢では、背中が一番濡れる。ミノは背中をスッポリとおおうように作られている。そして雨の水分は背中だけでなく体の前のミノを伝って落ちるようになっている。背中を雨に濡れたミノは、水分を吸ってかなり重くなると思った。

モッコとは「持籠(もちこ)の音便であり、藁筵(わらむしる)または藁縄を網状に編んだものの四隅に吊紐をつけ土芥^[2]・肥料・農産物などを盛って運ぶ用具」と広辞苑に記されている。

A氏によると、縄で編んだモッコはワラ縄とシュロ縄の2種類があるという。ワラ縄は水に濡れると早く腐るため、シュロ縄で作つたモッコ

の方が丈夫で長持ちした。在所ではシュロ縄を買つてモッコを作つた。

モッコを使って畑でとれた野菜、牛肥、米、砂利などを運んだ。モッコの運び方は、一人で担ぐ「一人モッコ」(写真8)と二人で担ぐ「二人モッコ」がある。一人モッコは担ぎ棒の両端にモッコをつり下げて運ぶ。モッコは2つで「イッカ」と呼ぶ。「今日は牛小屋の肥出しやとゆうて(言つて)、モッコで牛肥を運んだもんや」(A氏)。牛肥は一人モッコで運んだ。牛は敷きワラの上に糞をしているので、ワラと混じつた牛肥はモッコの網からこぼれ落ちることはない。

二人モッコは、米や野菜などの重い物を運ぶ。担ぎ棒の真ん中に1つのモッコをつり下げて、各人が棒のそれぞれの端を肩にのせて担いだ。運搬物はヒゲナシ^[3]に入れて、モッコでつって運んだ。その他にタケモッコがある。5cm程の深さがあるタケで編んだモッコである。主に河原の砂利や砂を運ぶのに用いた。これらはヒゲナシに入れて二人モッコで運んだ。

すなわち、モッコで運ぶ際にはヒゲナシはなくてはならないものであつた。モッコだけでなく大八車での運搬にもヒゲナシは用いられていた。在所のそれぞれの納屋には古くなつたたくさんヒゲナシが積んであつた。運搬や収納に使えるヒゲナシは重宝だつたことが分かる。ヒゲナシは農閑期のワラ仕事で作られた。次に農具とワラ仕事について紹介したい。



写真4: 男ミノ着装: 後

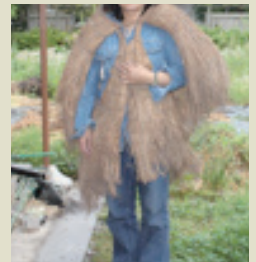


写真5: 男ミノ着装: 前



写真6: モッコ
シュロ縄で作られている



写真7: A氏とモッコの使い方を話すSさん



写真8: 一人モッコ A氏実演



写真3: 男ミノ。手前のミノが体の前をおおう。後ろが背中をおおうミノである。

[1] 納屋に農具が置かれている状態は本ニューズレター No.40にも写真で掲載。

[2] 土芥: 土やゴミのこと。

[3] 本ニューズレター No.60 参照。

山北地区山熊田の赤カブ漬け体験

京都学園大学 鈴木玲治

2013年11月16日に、新潟県村上市山北地区山熊田の「さんぼく生業の里企業組合」（以下、組合）が主催する赤カブ漬け体験会に参加した。この体験会は、10月中旬～11月中旬の週末を中心に年間で計10回ほど行われ、毎年400～500人程度の参加者を集めている。参加費は昼食費込み



写真1：会場の様子

で3000円で、山熊田の焼畑で栽培された温海カブを甘酢漬けに加工する。現在では、前日に組合のスタッフが収穫しておいたカブが使われているが、3年ほど前までは焼畑での収穫体験と赤カブ漬け体験をセットで行っていた。しかしながら、多くの場合は焼畑地までのアクセスが悪く、参加者の車同士の事故などの心配もあることなどから、収穫体験は行わなくなったそうである。

温海カブを甘酢漬けに加工する手順は、以下の通りである。まず、カブ2kg（中玉で12ヶ程度）を1cm程度の厚さに切り、ビニール袋に入れる。次いで、塩60～70g、砂糖250～300g、五倍酢60cc、焼酎30ccを入れ、ビニール袋の中でよくかき混ぜる。通常は、まずカブを半日から2日程度塩漬けにして水分を抜いてから酢に漬けるが、このように塩を酢、焼酎、砂糖と同時に加える漬け方もある。このような漬け方は「ドブ漬け」と呼ばれ、山北地区ではよく行われている。しっかりかき混ぜると、カブの赤色がしみだし、酢・焼酎が赤く染まる。5～10分ほどかき混ぜた後、袋のままプラスチック製の漬物樽に移し、押しふたをして重石（約2kg）をする。ここまでの所用時間は約20～30分。温海カブの甘酢漬け2kgの仕込み完了である。この後は、参加者それぞれが自宅に持ち帰り、お好みの漬かり具合になったところで食べる。1週間程度漬ければ食べられ、1～2日後にかき混ぜて上下すると早くよい色がつくそうである。カブ漬け体験終了後は、隣の



写真2：温海カブとカブ漬け体験用の道具一式

部屋に移動しての昼食会である。地元の野菜・山菜をふんだんに使った郷土料理を食べ、その後は流れ解散となる。

この日の参加者は30名程度であり、中高年の女性グループが多かったが、夫婦で参加されている男性も6、7名ほどおられた。組合の方の話では、参加者の約8割はリピーターであり、新潟市からの参加者が多いそうである。参加者には、組合から毎年年賀状を送り、秋になると体験会の案内葉書も郵送している。また、体験会終了後には、全員に修了証書を交付し、3年連続の参加者には記念品の贈呈もあるなど、リピーターを増やすための様々な工夫がみられた。この体験会で知り合って仲良くなった人達も多いそうであり、体験会が組合のスタッフやその他のグループの人たちとの年に1度の交流の場となっているようであった。参加者は皆、和気あいあいとして楽しそうであり、リピーターが多いのもうなずける。余呉での今後の取り組みに向けて、色々と参考になることが多かった。

温海カブをつけ込んだ漬物樽を京都に持ち帰り、味見をして漬かり具合を確認しながら、10日後に食べてみた。漬けたての温海カブは、歯ごたえ、甘み、辛みのバランスが絶妙で、非常に美味しかった。この美味しさも、リピーターがあつまる大きな要因だろう。来年も、また参加したいと思う。



写真3：昼食会の郷土料理

催しのご案内

■ 京大大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所
京滋 FS 事業 第 59 回 実践型地域研究 定例研究会
日時 2013 年 10 月 1 日 (火) 17:00 ~ 19:00
場所 京都大学東南アジア研究所稲盛記念館2階東南亭
内容 過疎と離農の問題への実践型地域研究の取り組み—
ブータンのシェラブッチェ大学との美山町佐々里での
共同研究を中心に— (発表者: 京大東南アジア研究所
安藤和雄)

■ 京大大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所
京滋 FS 事業 第 60 回 実践型地域研究 定例研究会
日時 2013 年 10 月 25 日 (金) 17:00 ~ 19:00
場所 京都大学東南アジア研究所稲盛記念館2階東南亭
内容 カヤダイラの復元とカヤバシの焼き畑 (発表者: 京大東南アジ
ア研究所連携研究員・火野山ネット 今北哲也)

★以上の催し物への参加ご希望の方は、ご連絡ください。
京都大学 東南アジア研究所 実践型地域研究推進室
担当: 安藤和雄 (ando@cseas.kyoto-u.ac.jp) まで。

地域での介護予防事業の普及と今後の課題

東南アジア研究所 木村友美

人口高齢化による様々な社会問題が深刻さを増すなかで、少しでも「元気なお年寄り」を増やすべく、要介護状態になるのを未然に防ぐ「介護予防」への働きかけがますます求められている。その基盤は、地域の保健活動に大きくゆだねられている。近年、多くの自治体で実施されるようになってきている介護予防事業について、その創設の背景と実施内容の概要について紹介する。

日本では、2000年にドイツに次いで世界で2番目に介護保険法が創設された。そして、2005年には、予防に焦点をあてた大規模な法改正がおこなわれた。この、予防重視型システムの根幹として、要支援・要介護状態になる前に介護予防を推進し、地域福祉を包括的・継続的にマネジメントするための「地域支援事業」が創設された。この事業は、高齢者が可能な限り地域で自立した日常生活を営むことができるように支援することを目的としている^[1]。

介護予防事業は、この「地域支援事業」の取り組みのうちの一つである。地域支援事業は大きく3つの事業から成り立っている。①介護予防事業: 要支援・要介護になるおそれの高い高齢者に対し、ケアプランの作成や介入、地域住民への介護予防に関する普及啓発 ②包括的支援事業: 制度や地域住民の悩み等の総合相談窓口や、社会資源のマネジメント・連携 ③任意事業: 家族介護者の支援などである^[2]。

介護予防事業では、身体機能の低下がみられる高齢者をスクリーニング調査によって「特定高齢者」として把握し、通所型介護予防事業や訪問型介護予防事業を行っている。この、通所型介護予防事業というものが、地域の公民館や保健センターなどの施設に特定高齢者を集めて行っている「運動教室」や「栄養教室」のような活動である。

しかし、諸外国から注目されたこの先進的な介護予防事業も、普及にともないその問題点や課題が浮き彫りとなってきている。2008年に行われた調査によると、1785自治体(調査時の平成20年11月1日現在の全市町村1805のうち98.9%の有効回答)のうち、行っている通所型介護予防事業の種類では、8割以上が「運動器の機能

向上(運動教室)のみ」と回答しており、高齢期に重要な栄養・口腔分野では実施頻度がきわめて低く、さらにもっとも住民の関心度の高い「認知機能の維持・向上」については通年の実施を行う自治体はなかった。実施頻度の高い運動教室においても、参加者は65歳以上人口のうち0.4%にとどまっており(平成19年)、参加率の低さがうかがえる^[3]。

また、市町村の特徴別にみると、市町村人口が多いほど参加率は低いという相関がみられている。これには、都市では公的サービス以外の民間の施設(スポーツジム、リハビリテーション施設など)を通じた健康活動の機会が充実していること、独居世帯が多いうえに近所で連れ合っただけの参加というケースが少ないこと、また、そもそも特定高齢者スクリーニングへの非参加者が多く虚弱高齢者を自治体が把握しきれていないこと、などが原因であると考察されている。通所型介護予防事業への参加率には、そのような様々な要因が関連していると思われるが、ある注目すべきデータがある。それは、「高齢者1万人あたりの介護予防活動に関わる自主グループ数が多いほど、参加率が高い」ということである。ここでいう自主グループとは、地域の老人クラブなどを母体とするスポーツクラブや、料理クラブのようなもの、手芸や園芸、お手玉クラブというようなものも含まれる。このような、自主グループの数が地域に多いほど、介護予防事業への参加率も高くなっているということである。

高齢者の、地域での豊かな老いを目指す介護予防事業をより効果的なものにするには、上述のように運動教室のみに偏るのではなく、心理的健康、口腔・栄養状態、認知機能などの包括的なアプローチによる介入が望まれる。そして、保健福祉の分野のみならず、様々な分野のコミュニティ活動、教育、地元企業など、多分野からの取り組みも、介護予防事業をより発展させいくうえで重要であるといえる。専門化、高度技術化に注目が向けられやすい保健医療、介護の分野においてもやはり原点は「地域ぐるみ」の包括的アプローチが決め手になるのだということを忘れてはならない。

- [1] Tsutsui T, Muramatsu N. Japan's universal long-term care system reform of 2005: containing costs and realizing a vision, J Am Geriatr Soc 2007; 55:1458-63.
- [2] 厚生労働省 介護保険制度改革の概要 <http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/topics/0603/dl/data.pdf>
- [3] 財団法人日本公衆衛生協会 2008年11月「今後の介護予防事業のあり方に関する研究報告書」